

は臍頭十二指腸切除 97 例, 臍体尾部切除 17 例, 臍全摘 1 例で門脈合併切除は 27.8% に施行された. NCCN ガイドラインに基づく borderline resectable 臍癌は画像の再検討が可能であった 2005 年 3 月以降の 84 例中 23 例 (27.4%) であった. 補助化学療法は 81.8% に施行された. 組織学的進行度は Stage I 1.1%, II 6.7%, III 31.5%, IVa 34.8%, IVb 5.9%, 2 年生存率 48%, 5 年生存率 20% で, 進行度別では 5 年生存率が stage III/IVa でそれぞれ 38%, 39% であった. 当院における臍癌治療の現況を報告し, 今後の展望について考察する.

16 浸潤性臍管癌に対する術後補助化学療法: 肝還流化学療法 (LPC) の意義

高野 可赴・黒崎 功・皆川 昌広

滝沢 一泰・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【目的】LPC の意義を明らかにするため GEM 療法と GEM + LPC 療法の治療成績を比較検討.

【対象・方法】対象は臍癌切除 100 例中, 術後 1 コース以上の GEM が投与された 77 例. GEM 群 (55 例), LPC-G 群 (22 例). 本研究では (1) 全 77 例中における予後因子解析, (2) LPC-G22 例に対する matched-pair 分析を施行.

【結果】(1) 多変量解析では R1, LPC (-), 中低分化型腺癌, N (+) が独立予後因子. (2) matched-pair 分析では 3 年生存率は GEM 群 35%, LPC-G 群 75% ($p = 0.069$). 肝が最初の再発臓器は, LPC-G 群 1 例 (12.5%), GEM 群 4 例 (30.8%). OS において N1 + N2 群では LPC-G 群が有意に予後良好 ($p = 0.001$).

【結論】LPC + GEM 療法は比較的良好な治療成績だが, N 因子やステージに影響を受け外科的局所制御がなお重要である.

17 臍癌微小肝転移の術中検出とその臨床的意義

横山 直行・大谷 哲也・眞部 祥一

須藤 翔・堅田 朋大・池野 嘉信

豊田 亮・岩谷 昭・山崎 俊幸

桑原 史郎・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科

【背景】当施設では, 2009 年 7 月から ICG-赤外線蛍光システム PDE を用いた臍癌微小肝転移の微小肝転移検索を行ってきた.

【対象・方法】画像検査で肝転移陰性とされた臍癌 59 手術例を対象とした. 手術前日に ICG 25mg を静注し, 術中に肝を PDE で観察. 異常蛍光部は生検のうえ, 迅速病理診に提出. 微小転移が確認された症例は非切除とし, 塩酸ゲムシタピンを用いた全身化学療法を施行した.

【結果】微小肝転移は, 8 例 (14%) で確認された. 全 8 例は cT3/4 の局所進行例であり, 術前血中 CA19-9 値が高値であった ($P < 0.05$). 術後 6 ヶ月経過時, 微小肝転移陽性 8 例中 7 例 (88%) で, 多発肝転移が画像上顕性化した. 一方, 微小転移陰性例の肝転移顕在化は 4 例 (9%) のみだった ($P < 0.01$).

【結語】臍癌微小肝転移は, 顕性遠隔転移と同等の臨床的意義を有する. 微小肝転移陽性臍癌に対する根治切除の適応はなく, 全身化学療法に加え肝特異的抗癌治療が必要と考えられる.

18 当科における浸潤性臍管癌の治療成績

土屋 嘉昭・野村 達也・會澤 雅樹

梨本 篤・藪崎 裕・瀧井 康公

中川 悟・丸山 聡・松木 淳

本山 展隆*・本間 慶一**

県立がんセンター新潟病院外科

同 内科*

同 病理**

当科で過去 18 年間に経験した浸潤性臍管癌症例は 414 例で男性 241 例女性 173 例, 年齢 34 ~ 86 歳 (中央値 67 歳), 臍切除例は 308 例・姑息的手術 70 例・試験開腹 23 例・非開腹例 28 例で